HPJ製作工房・おりほん８

Twitter300字ss

2015年04月～2015年07月

森村直也
@hpjhal

twitter企画、Twitter300字ssに提出した作品集です。
Twitter300字ssについてはこちら
http://privatter.net/p/310549

匂い～紅香晶

2015/04

――目立たないといけないから。
一番強く魅力的な香りを手に入れた。
紅い結晶を飲み続ければ、内から香りが生まれるという。
――この世界で生きていく為に。
「いらっしゃいませ」
ヘルプに入れば、姐さんの常客は弾かれたように私を見た。
指名も増えた。常連も付いた。
――容姿は主張。声は誘い。匂いは暴力……感情を強制する。
暴力がなに。強制がなんだというの。
空気のように無害な私なんて要らない。
香りと共に、私はこの世界で生きていく。
この世界で。

＊

匂いは暴力。匂いは誘惑。匂いは嫌悪。
流れた紅は結晶となって散らばって。僕はそれらを拾い集める。
寂しがることはないよ。
君を殺めた彼らはみんな、君の虜だったのだから。

雨～溶雨

2015/05

雨がしとしとと降り出すと、車椅子を懸命に動かして、あなたは小さな庭へと一人出る。
屋根もなく、ぬれる煉瓦の小道は滑り、僕らをいつも困らせた。
「風邪引きますよ」
「ここは病院ですよ？」
僕の声にからからと笑う。
「雨はいろいろなものを含んでいるのよ」
何だと思う？　いたずらっぽく聞かれたから。
「ＮＯｘ？　それとも埃？」
答えてみたら、違う違うと返された。
あなたは細めた目のまま空を見上げる。雨の向こうの空の先を。
「虹のはしっこ。地球を旅する風の匂い。それに」
寂しそうな笑み、だったから。
「戻りましょう」
あなたが溶けてしまう前に。無理矢理グリップを握りしめた。
――空に消えたあの人の。想いの欠片が落ちてくる。

雨～豪雨

2015/05

少しばかり高いビルの上に立つ。
生温い風に刺すような冷たさを感じたら、時を逃さずそれを放つ。
ヘッドセットをオンにして視覚を電子に明け渡せば、街が眼下に遠ざかる。
手元の操作で空を目指す。マイクは風音を拾い続ける。
肌に纏い付く重い風は視界と共に滴に変わり、あっという間に白濁し。
姿勢制御はフル稼働。右へ左へ上へ下へ。揺れる視界に尻餅ついて、さらにローターの回転数を。
まだ足りない。持て。もう少し。あと。
――抜けた！
視界を埋める大粒の氷晶、舞い飛ぶ水滴、波打つ壁雲、その向こう。
光り、のたうち、昇り、弾ける。
幾筋もの、光の龍を。
バチリと視界が暗転し。セットを脱ぎ捨て見上げた空から。
巨大な雨滴が落ち始めた。

願い～願いの力

2015/06

「言葉は音」
蝉の声が響き渡る入道雲の映える空を見上げて、一番若い叔父は言いました。
「音は波で、波は力」
わかるかと聞かれたものの、幼い私は赤い紙をもてあそぶ叔父を、きょとんと見上げるばかりでした。
「力はそこにあるもので」
ごうごうと音を立てて、編隊を組んだ飛行機があっという間に過ぎって行きました。飛行機を見上げた叔父の薄く笑んだ横顔を、
「何時か誰かにきっと届く」
大きな手が降ってきたことを覚えています。
「おほしさまにも？」
私の小さな問いかけに、叔父の瞳はふっと柔らかな弧を描きました。
「千代が願えば」
だから私は今日も流れ星へと願うのです。
叔父が私の頭をそっと撫でてくれることを。
遠い南から今帰ったよと。

願い～空の中の飛行機

2015/06

じぃわじぃわと蝉が啼き、陽炎の中でお姉さん用務員は水を撒く。
兄ちゃん先生は黒板を叩く。白い点を中心に、幾本もの同心円が教室の僕らを見下ろしている。
「音は空間を伝わっていく。距離の三乗に比例して減衰するけど、ゼロにはならない」
「声ちっさくっても届くっつーことですかぁ？」
間延びした声に頷いた。
「雑音に紛れてしまうけどね」
じゃぁ。委員長の甲高い声。
「みんなが一斉に同じこと言えば、空の上にも届きますか？」
遠く高くきぃんと聞こえる。見上げれば蒼にすらりと伸びる白い雲。
例えば、七夕の夜に織姫と彦星が会えますようにとか。
大人たちが早く帰ってきますように、とか。
僕らの願いが詰まった空の中を飛行機が飛んでいく。

願い～define

2015/06

殻の中で受精卵はくるりと回る。動物極を上に向け、発生しようと仕組みのままに。
植物の種は待ち続ける。温度を光を雨降りを、発芽に最適な瞬間を。自動的な反応に乗せて。
決められた動植物を死なないために摂取する。弱肉強食と呼ばれながら、摂理であると言われながら。本能という定義のまま。
生まれたばかりの赤子は、第一声で主張する。ここにあること。生きるのだと願うこと。
「生きることが願うことと等価なら」
陽に溶けそうな笑顔で紡いだ。
「願わなければどうなるだろうね」
どういうこと？
私の疑問を君は確かに受け止めた。柔らかな笑みのままに目を閉じて。
陽射しが揺らぐ。見返した窓の脇には、一枚の――。
私の願いは、空へと溶けた。

お盆～心残り

2015/07

すれ違う派手な姿をふと目にし、私は思わず足を止めた。
そんなはず無い。気のせいだ。
先へ行こうと足を出し。結局きゅるりと向きを変えた。
見て見ぬフリがこの場のルール。
覚えのある顔だったとしても、声をかけてはいけないよ。
でも。
派手な兜を目印に、かろうじて見える影を追う。
炎天下のアスファルトの上、ようやく追いつき認めた顔は、青白くもこの上もなくイイもので。
声をかけるのを諦めた。

＊

夕空をナスの牛がのんびり見上げる。
日焼けていない不機嫌顔が、仏壇からこちらを見ている。
「心残りは、もうないですかー？」
コスプレするまで死ねないなんて、確かにぼやいていたけれど。
送り火代わりの線香花火が珠を結んでぽとりと落ちた。